**美濃焼：1300年の歴史**

「美濃焼」とは、現在の多治見市、土岐市、瑞浪市、可児市を含む美濃地方で生産された陶磁器を広く指す。

この谷は、1300年以上も前から、3つの環境要因によって陶磁器の生産拠点となっている。1つ目は、古代の湖が残した沖積粘土である。上流からの土砂が湖に運ばれ、大きなものは砕かれて細かい泥となり、良質の粘土となった。2つ目は、低い丘の自然な傾斜が窯の建設に適していること。そして、3つ目の重要な資源は、豊富なアカマツの森林である。赤松には天然の油分が含まれているため、他の木材に比べて高温で長く火を通すことができ、陶器の焼成に適しているのである。

陶磁器の産地では、それぞれ釉薬の色やスタイルが決まっていることが多い。一方、美濃焼は、社会や政治の変化に対応し、新しい市場を開拓しながら、その表情や形を大きく変えてきた。美濃焼には、昔、農民や町民が使っていた飾り気のない大量生産の山茶碗から、最近に至るまでヨーロッパのサロンで使われている金の縁取りが施されたティーセットまで、さまざまな種類の陶磁器がある。展示を反時計回りに見ていくと、8世紀のシンプルな素焼きの須恵器から、人間国宝の石器や磁器の色鮮やかな現代の名品まで、美濃焼の進化の全体像が見えてくる。